ALULA(No.63,2021 秋号):72-77.

『シジュウカラガン物語』編著にかかわって

京都市山科区　須川恒

2021 年 7 月 15 日にここ 5 年ほどの懸案となっていた以下の本をついに出版した。

呉地正行・須川恒(日本雁を保護する会)編(2021)シジュウカラガン物語　しあわせを運ぶ渡り鳥、日本の空にふたたび！.京都通信社.

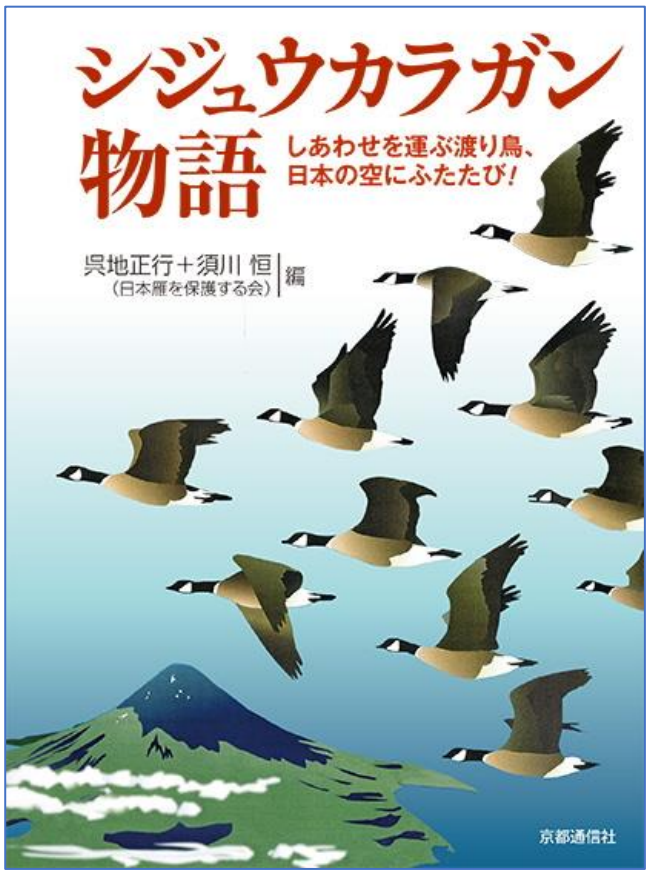

図１　『シジュウカラガン物語』の表紙

タイトルの『シジュウカラガン物語』だけみると何か絵本のようなものを想像される方もいるようだが、全部で 304 ページ口絵写真が5ページの 10 章構成で、シジュウカラガン *Branta hutchinsii leucopareia* が絶滅した過程から復活したドラマを描いている。

編著者としては『シジュウカラガン物語』はこの世に生み出した赤子のようなものである。みなに関心を持ってもらえれば一人歩きをして育っていって、おおきく時代を変える本になるかもしれない。それだけのメッセージを込めているつもりである。

左のシジュウカラガン物語の普及・啓発サイト
http://larus.c.ooco.jp/ACGSTORY.htm　から
京都通信社のこの本の紹介と購入サイトにもリンクしてある。
左の URL からどうぞ。

そのためにもどうか手にとって読んでいただきたい。入手される場合は上記の『シジュウカラガン物語』の普及啓発を目的としたサイトにアクセスしていただくと、京都通信社のこの本の紹介および購入サイトにリンクしてあり送料なしで送られてくるのが一番早い。

でも本を読む習慣を持っている人も、もう自宅に置く本を増やしたくないと思う人もいるだろう。そのような方は、ぜひ近くの公立図書館に希望を出して借り出して読んで欲しい。須川は、京都府・京都市の図書館に希望を出していずれも購入してもらえた。各地の公立図書館の 488(NDC 鳥類)の棚に並んで多くの人の目にとまることを念願している。

また、これは興味深い本だからと、まわりの人々に手渡す中継をしてもいいと思われる方は、ぜひ須川 (cxd00117@nifty.ne.jp) まで連絡をしていただきたい。10 冊単位に多少安くお送りできる。

各章の概要

けっこう長期にわたる経過を各章ごとにつみあげて書いているので、本のガイドとして各章の概要を紹介する。

シジュウカラガン物語の目次は以下

表紙・裏表紙
はじめに 群れよ、日本の空にふたたび！
口絵写真 5p
第１章 絶滅したシジュウカラガンを復活させたい 主要人物一覧 年表
第２章 シジュウカラガンの生態と人とのかかわり
第３章 絶海の島に奇跡の小さな群れを発見
第４章 日本の回復計画の成功と失敗―― 潜んでいた落とし穴
第５章 伝説の鳥類学者、ニコライ・ゲラシモフとの邂逅
第６章 日米ロの三国で共同プロジェクトがはじまる
―― カムチャツカに繁殖施設をつくり、放鳥を開始
第７章 カムチャツカで数を増やし、エカルマ島に放鳥する
第８章 「増やそうシジュウカラガン」、「減らそうカナダガン」
第９章 5,000 羽の群れが北日本の空を舞う!
第 10 章 未来に向けた活動 ―― ガンとの共生をめざす「ふゆみずたんぼ」
日ロ米で物語を見守る三人からのメッセージ
おわりにかえて

この本は主編著者としての日本雁を保護する会現会長呉地正行(宮城在)が著者としてかかわっている部分が多いが、第５章からは共著者として須川もかかわりはじめる。

この本は随所に故幕田晶子(2018 年に他界)のイラストがでてくる。表紙(図1)とはじめにに彼女のイラスト作品が出てくる。1 章に紹介しているように 2017 年 11 月に千葉県我孫子市で開催されたジャパンバードフェスティバルでシジュウカラガン復活をアピールするブース展示を2日間行った。この時の展示内容はほとんどが幕田のイラストとデザインだった。幕田は 20 年間、宮城の地でシジュウカラガンをはじめとするガン類と湿地保全を巡る多くの作品をつくられたが若くして他界され追悼する企画を日本鳥学会大会で行った(呉地・須川,2020)。

さて第1章はこの本全体のつかみである。日本雁を保護する会前会長横田義雄のシジュウカラガン復活への執念、当時では妄想としか考えられない話の紹介からはじまる。最近になって、各地でシジュウカラガンが多数観察されたとの報告につづき、この本にかかわる写真つきの登場人物一覧、日ロ米の経過を示す年表がある。多くのかかわっている人々の歴史を追った物語として読む際に役立つと思う。

第2章はシジュウカラガンとは何か、またなぜシジュウカラガンが絶滅に瀕することになったのかを、毛皮獣を巡る歴史の中で描いている。その現場となった千島列島で最近はじまった海鳥観察ツアーで得られた情報も紹介されている。第3章は 1960 年代からはじまった米国におけるシジュウカラガン復活の成功物語である。2章、3章は呉地が歴史を書きおこす作業をした。

第4章からは 1980 年代になって呉地もかかわった日本ではじまったシジュウカラガン復活活動の紹介である。1980 年に札幌で開催され水鳥の国際会議で、第3章で述べた米国の復活計画の中心人物の一人と出会うことができ、日本におけるシジュウカラガン復活の活動を開始するための重要な手がかりを横田らは得ることができた。仙台市八木山動物公園の協力を得て、米国における研修、米国からシジュウカラガンを輸送してもらい、日本でも増殖に成功し越冬地や中継地における放鳥をはじめることができた。しかし、この放鳥方式は壁にぶつかり成功しなかった。

第5章にはいると、まず 1970 年代末に鴨川の標識されたユリカモメ *Larus ridibundus* をきっかけとして須川がカムチャツカの鳥類学者ニコライ・ゲラシモフを知り合った経過、須川が呉地らに出会って、そのつながりが亜種オオヒシクイ *Anser fabalis middentdorffii* や亜種ヒシクイ *A.f.serrirostris* の首輪標識を活用した渡り解明につながった話を紹介している。これらの話は足環物語(須川 2009 など)として紹介しているし、カムチャツカは 1997 年から 2000 年にかけて日本鳥類標識協会の日ロ共同調査(深井他,2010;須川他,2010)があってかかわった人も多いので知っている人も多いと思う。

ただし、シジュウカラガンとニコライ・ゲラシモフとのかかわりの詳細は知られておらずこの本ではじめて描かれている。第5章で紹介しているように、1989 年に

日本雁を保護する会が彼を日本に招待したことが大きかった。ゲラシモフは仙台の八木山動物公園でシジュウカラガンに出会い、シジュウカラガン復活活動への参加を決意する。これで、越冬地・中継地放鳥の壁をやぶる新しい展開がみえてきた。

この本では、ゲラシモフの心の内面がいろいろと描けた。それは、2011 年にロシアで出版されたゲラシモフ夫妻の著書『雁とともに 20 年』の仮訳版が千村裕子・加藤太一の協力でできたためである。

第6章には、経済が崩壊してしまった 1992 年のカムチャツカでシジュウカラガンの繁殖施設をどのようにつくることができたのかを描いている。第7章があつかっているのは 1994 年頃から 2006 年頃までの 12 年間で、繁殖施設におけるゲラシモフ夫妻の地道な活動が実って多くの幼鳥がうまれ、八木山動物公園の支援を得て、キツネのいない千島列島のエカルマ島へヘリコプターで輸送放鳥する活動を描いている。最初はなかなか成果がでなかったものの、2005-6 年頃になってめぼしい成果が見え出したところまでを描く。

第8章は、外来種のカナダガンを減らして野外から根絶できた話題が間に入る。深刻な外来種問題も侵入初期の段階で努力すれば野外で根絶もできる。環境省によってカナダガンは成功例として紹介されている。この章ではその経過の詳細を知ることができる。章のタイトルは「増やそうシジュウカラガン」、「減らそうカナダガン」であり、このプロジェクトがシジュウカラガン復活物語の大切なパーツであることをご理解いただけると思う。

第9章はカムチャツカにおける繁殖活動の最終段階に被った課題を巡る話題と、シジュウカラガン復活の最新情報を紹介している。2009 年火山活動にともなう洪水と繁殖施設の水没、2010 年最終放鳥にともなう資金不足をどうするのかへのミラクルな民間支援、東日本大震災で被害を受けた呉地らを元気づけるように毎年のシジュウカラガンの越冬数が増加、ついに 5000 羽を越え、この本の冒頭に出てきた七北田湿地へシジュウカラガンがやってきた経過を描く。

最終の第 10 章は、シジュウカラガンにかぎらず、日本国内で限定されているガン類の越冬地をそもそも増やすためにはどうすればよいのか、その手がかりとして「ふゆみずたんぼ」のアイデアが得られた宮城県大崎市蕪栗沼を巡る活動を呉地が紹介している。

おわりにかえてでは「物語のおわりは、新たな物語のはじまり」と書いている。第10章は全国にガン類渡来復活のまさにあらたな物語のはじまりの章でもある。

出版の経過と編集者としてのかかわり

出版の経過としては、ニコライ・ゲラシモフ夫妻の『雁とともに 20 年』の仮訳版ができ、これに多少詳細な解説を書いて日本で出版する企画をしたが成立しな

かった。京都で自然系の出版物もある京都通信社に相談すると、ロシア側からの視点も大切だが日本側でないと描けない章や米国の復活の章などを総合的に描く本としての企画が大切との助言が得られた。

2016 年サントリーの世界愛鳥基金から、これまでも支援してきたシジュウカラガンがめざましい成果が出てきたことを普及啓発する趣旨での支援が決まった。出版の助成としても一部は使えるが、京都通信社は、広い読者を対象とした興味深い本でないと出版は無理とのことだった。

副編集者としての須川の役割は、まず呉地でないと書けない章の尻たたきと、京都通信社も納得できるスタイルにすることの調整役だった。

呉地のかかわりやストックしている資料は膨大なものがある。しかし、呉地は内外の懸案に多くかかわっていて超多忙だった。宮城の自宅では次々と仕事の連絡も入るのでおちついて執筆する時間が確保できないとのことだった。そこで 2016 年から京都の須川宅の一室を呉地のカンズメ部屋として提供し、作家呉地の執筆と相談の合宿がはじまった。いろいろの息抜き企画もしたが 10 日間ほど呉地をカンズメにすると一章分のたたき台ができるといった感じで進んでいった。

2019 年春に、たたき台の文と基本構成がほぼ確定し、京都通信社との間で初校、二校、三校、念校とのやりとりがはじまった。

初校の段階では、ドキュメントとして統一したスタイルの文になっているかについて京都通信社から多くの助言を得た。

このようなドキュメントのスタイルで須川が手がかりにしたのは岩手の動物文学作家遠藤公男の諸著作である(須川,2009)。遠藤には元祖足環物語といえる「アリランの青い鳥」もある。遠藤の諸著作もそうだが、同じドキュメントでも現場を著者が経験して描いているものもあれば、歴史作家として過去の資料や聴きとりから再現している内容もある。いずれも時代と地域の中でかかわった人々の活動をどう興味深く描くかがポイントだと思った。「シジュウカラガン物語」でもこれらの方針で描くことに努力した。

最初は B6 版という想定だったが A5 版と少し大きい版となり、各ページの上端にスペースがあって脚注や図表写真を入れるというスタイルにしたいと京都通信社から提案があった。最初は驚いたが、引用文献や脚注を本文と近い場所に入れることができるスタイルに慣れてきた。

呉地も須川も細部のいくつかのエピソードにこだわった。第5章で紹介した「トフォミロフ事件」は、ソ連時代に研究者を招待する苦労をあらわすエピソードで、解決にいたる真相が理解できる図も入れて解説した。読まれた方が、どんなエピソードやトリビアに関心をもっていただけたかが気になる。

2020 年春からコロナ禍がはじまり京都宅での合宿もできなくなったが、無料 Skype によるオンライン会合には助けられた。有料の Zoom の会合は定番となっ

ているが、Skype でも画面共有や動画記録が残せて、少人数のオンライン会合には便利だと判り編集作業にもよく使った。

編集者の大きな悩みが「言葉のゆらぎ」である。使っている語句が文のあちこちで微妙に違っていることが多かった。ゆらいでいる言葉を見つけ出してできるだけ統一する作業が必要だった。外国語の表記、特に人名や地名についてのロシア語表記は日ロ渡り鳥条約会議でのロシア語通訳もしている千村裕子に協力いただいた。

編集作業が予定より延びたおかげで、呉地が書き足したいシジュウカラガンに関するあたらしい情報がいろいろと出てきた。でも「三校、念校では通常そこまで書き直せません」といった出版社側の事情との間での調整役を須川がし、ほぼ盛り込んでいただけた。

当初から幕田晶子が案をつくっていた表紙(裏表紙も)のイラストを呉地も須川も採用したかったが、彼女の遺言にもとづき彼女が他界後にPCは遺族によって破棄されていた。このためPC中に残っていたと思われる表紙の原図ファイルが利用できないという問題にぶつかった。イラストの仕事もやってる須川の姪が「ファイルがなくても原図を大きく印刷したものがあれば印刷ファイルとして活用できる」とのヒントをくれた。2017 年 11 月のバードフェス用につくったシジュウカラガン復活をアピールする大きなポップスタンドが活用できそうだった。呉地がスキャンファイルを作成し、2020 年年末から年明けに宮城の戸島直子がたりない部分のファイル復元作業をしてイラストレーターファイルを京都通信社に渡すことができた。この段階でやっと本が出せるという確かな手がかりを感じた。

裏表紙にある越冬地に到着したシジュウカラガンの群れをごらんいただきたい。シジュウカラガンは白い頬が遠目には白い手ぬぐいでほっかぶりをしているように見えることから「ほっかぶり雁」とも呼ばれている。幕田の絵の中に1羽ほっかぶりをしている雁がいるのを見つけて欲しい。

参考文献

呉地正行・須川恒(2020)幕田晶子さんのイラスト作品の水鳥と湿地保全への貢献(第 23 回 JOGA 集会),フォーラム日本鳥学会 2019 大会自由集会報告,日本鳥学会誌 69(1):128-131.

須川恒(2007)動物文学者遠藤公男の世界.ALULA(No.34,2007 春号):32-37.

須川恒(2009).鳥類標識調査と「足環物語」.ALULA(No.38,2009 春号):30-37.

須川恒・三原学・磯清志(2010)カムチャツカにおいて標識した鳥類の測定値のデータベース作成と測定値の概要.日本鳥類標識協会誌,22: 87-96.

深井宣男・須川恒・千葉晃・尾崎清明(2010)カムチャツカにおける日露共同標識調査報告.日本鳥類標識協会誌,22: 8‐36.